

自画像



せいぶつが 静物画



戦争



この鑑賞ガイドでは、1910年代後半から始まる展覧会の9つの章の流れをご紹介します。その後、二人の作品をキーワードで比べてみるワークシートがあります。作品のタイトルの下に、どの章に作品が展示されているかが書かれていますので、作品を観察して、ワークシートに取り組んでみましょう。

章解説

第1章

1910年代後半から20年代初頭：
日本人「移住者」としてのはじまり

「働くため」と「絵を学ぶため」
二人の海外生活の始まり

1906年、16歳の国吉はアメリカに向かいます。働くためにアメリカに行ったという国吉ですが、英語を習うため通っていた現地の公立学校で先生にすすめられたことをきっかけに、画家になることを決め、ニューヨークのアート・スチューデント・リーグという美術の学校で学びます。藤田は東京美術学校を卒業した後、1913年、26歳の時に、絵をもっと学ぶためにフランスのパリに渡ります。パリでは、「サロン」と呼ばれる展覧会でどんどん入選しました。

第2章

1922年から24年：
異国での成功

アメリカとフランス
それぞれの成功

女性たちの美しい白い肌。「乳白色の下地」と呼ばれるスタイルを完成させた藤田は、「サロン」で多くの作品を発表し、高く評価されます。ニューヨークの国吉は、1922年に現地で評判の画廊で初めての展覧会を行い、注目を集めました。

第3章

1925年と1928年：
藤田のパリ絶頂期と国吉の渡欧

藤田、パリで初めて大活躍
国吉、初めてパリに行く

今から百年前の1925年、フランスのパリでは装飾芸術の博覧会が行われます。国吉は1925年と1928年にパリに滞在します。直接会ったという証拠はありませんが、ジュール・パスキンや清水登之など、共通の画家の友達もいて、同じ時にパリで暮らしていました。二人はあちこちで出会っていたはずです。

第4章

1929/1930/1931年：
ニューヨークでの交流とそれぞれの日本帰国

ニューヨークで
二人が対面！

1929年、藤田はフランスに渡ってから初めて16年ぶりに日本に帰って展覧会を開催します。短い帰国の後に一度パリに戻り、1930年にはアメリカに行きます。ニューヨークで、藤田と国吉は直接交流しました。藤田は日本の知人たちに国吉を紹介する手紙を書き、国吉は1931年に25年ぶりに日本に帰国し、展覧会を開き、久しぶりに家族と会いました。

第5章

1930年代：
軍国主義化する母国の内外で

日本、藤田とアメリカの国吉、不安定な世界で生きる

1930年に入ると、藤田はパリを出発した後、途中でメキシコなどに寄りながら、1933年秋に再び日本に戻ります。国吉は外国人でありながらも、アメリカで多くの賞を受賞します。母校で先生になり、芸術家たちの団体にも積極的に参加し、活発に社会的な活動をしします。1939年にヨーロッパで第二次世界大戦が始まりました。

第6章

1941年から45年：
日米開戦下の、運命の二人

日本とアメリカの戦いが、二人の運命を変える

1941年12月に始まった日本とアメリカの間の太平洋戦争が、二人の人生に大きなショックを与えます。フランスから日本に戻っていた藤田は、戦争の様子を伝える「作戦記録画」を制作します。自分の生まれた国と暮らしている国の間で戦争が起こっても、国吉はアメリカで絵を描き続けました。

第7章

1946年から48年：
戦後の再生と異夢

戦争が終わり、それぞれが新しい夢をみる

1945年8月に太平洋戦争が終わります。藤田は戦争が始まる前と同じような、美しい西洋の女性たちや夢のような風景を描きながら、またフランスへ渡る方法を探します。国吉は、絵を描くことや芸術家の団体の活動も忙しくなります。1948年には、ホイットニー美術館というアメリカの大きな美術館で、生きている作家として初めての個展を開催しました。

第8章

1949年ニューヨーク：
すれ違う二人

再び、二人は同じ街で暮らすけれど……

藤田は1949年3月に日本を離れてアメリカに行き、10カ月間ニューヨークに滞在します。ニューヨークではたくさんの画材を手に入れたり、美術館で美しい絵画と再会したりして、11月に新しく描いた作品を発表する個展を画廊で行いました。国吉は藤田がいない時に作品を見に行き、二人がニューヨークで再会することはなかったようです。

第9章

1950年から53年：
藤田のフランス永住と国吉の死

藤田はフランス、国吉はアメリカ
それぞれの場所

1950年の秋ごろに体調を崩した国吉は、53年5月に亡くなりました。法律が変わって、日本で生まれた人でもアメリカの国籍を取れるようになり、国吉もアメリカ国籍に変えようと準備をしていた最中のことでした。藤田は1950年のはじめにパリに戻り、55年には日本からフランスの国籍へと変更しました。キリスト教のカトリックに改宗した後、1968年に亡くなりました。

動物

藤田嗣治《ラ・フォンテーヌ頌》
1949年（第8章、F33）

国吉康雄《夢》
1922年（第1章、K05）

キツネの一家が、人間の洋服を着て、食器を使ってご飯を食べているところです。よく見ると、生肉や魚が並んで、人間の暮らしとは違うようです。階段の横には、フランスの詩人ラ・フォンテーヌのつくった物語、
「からすときつね」の絵がかけられています。

夜にわたしたちが見る夢の中のような風景です。たくさんの種類の木や草、雨や草がまっすぐな線で描かれています。女の子は何かから逃げているところでしょうか。急に現れた赤い牛に驚いたのかもしれませんが。五年生まれの国吉は、牛の絵をたくさん描きました。

セリフを想像してみよう！

藤田嗣治《ラ・フォンテーヌ頌》

キツネA

キツネB

キツネC

国吉康雄《夢》

女の子

牛

仮面・マスク

藤田嗣治《舞踏会の前》
1925年（第3章、F14）

国吉康雄《ミスターエース》
1952年（第9章、K79）

ダンスパーティーに出かける準備をしている女性たちが描かれています。これからドレスを着るのか、裸の人や布を手を持っている人もいます。よく見ると、仮面が床の上に置かれています。これから着飾って参加するのは、仮面舞踏会なのでしょうか。こちらを振り向く男性は、赤い服に三角形の帽子、それから頭に緑の仮面をつけており、サーカスのピエロのように見えます。絵の左下に黄色い仮面の小さな人物がひょっこりと顔を出しています。上の方に見えるハイヒールをはいた女性の足は何かの看板でしょうか。

気持ちを想像してみよう！

こちらを真っすぐに見つめる女性は、どんなことを考えているのだろう。

ピエロのような男性は不思議な表情をしています。どんなことを考えているのだろう。